

023 1-P-第8会場-15:48

癌における望診の有効性について

日本ニカラグア東洋医学高等研究院

田中 慶秀

【目的】東洋医学的な診断法の一つとして、望診情報は患者の全身状態を把握する方法として用いられている。今回、各種の癌患者において顔面診、舌診などの望診情報を詳細に観察したところ、共通する特徴が認められた。本報告では、確認できた特徴を詳細にまとめ、東洋医学的な臨床診断法としての望診の意義を症例に基づいて報告する。

【方法】対象は過去30年間、ニカラグアの日本東洋医学高等研究院の附属診療所および報告者が経営する治療所に来院された癌患者（男性12名、女性12名。平均年齢50歳）とした。癌の種類は白血病8例、子宮癌2例、肺癌2例、胃癌2例、その他の癌10例であった。パナソニック社製デジタルカメラ（DMC-LS1）を使用し、マクロの撮影設定で眼および舌を、通常設定で顔面部および腹部を撮影した。これらの撮影した画像から、癌患者における舌所見の特徴を観察した。

【結果】顔面診では、末期のターミナル期に近づくにつれ、肌が黄色となり、表情から気力のなくなる傾向を認めた。舌診では、舌縁部（肝・胆系）が「ぎざぎざ」となり、舌根部（腎・膀胱経）の色が赤から白、そして黄色へと推移することを確認した。さらに、眼診では、白眼（肺・大腸経）に分泌液が増え、その眼の色は、白から赤、そして黄色へと推移し、塊となった分泌物を見ることもあった。また、腹診においては末期になるとともに、悪液質のため下腹部の膨張を認めた。

【考察・結語】望診情報は、癌患者の病期や経過を把握する評価方法として有用な情報となることを示した。今後、症例集積を重ね、癌の種類やステージとの関連などをより詳細に検討を進め、さらに、癌患者のターミナルケアにおける、治療効果を評価する情報としても有用となるかどうかを検討していく。

キーワード：癌、ターミナルケア、望診、舌診、ニカラグア

024 1-P-第8会場-16:00

舌診・顔面診撮影システムの導入と運用

- 1) 明治国際医療大学 鍼灸学部 伝統鍼灸学教室
- 2) 明治国際医療大学 鍼灸学部 臨床鍼灸学教室
- 3) 明治国際医療大学 鍼灸学部 予防・健康鍼灸学教室
和辻 直¹⁾、関 真亮¹⁾、篠原 昭二¹⁾、
北小路 博司²⁾、矢野 忠³⁾

【目的】舌診は東洋医学の診察の中で客観化しやすい所見である。最近、舌診の客観化の基本的手法として、積分球と人工太陽灯を組み合わせた舌診撮影システムが有用であることは既に中城氏が報告し、拙者らが研究調査として用いている。我々は昨年にシステムを改良した舌診・顔面診撮影システムを開発し、鍼灸臨床における有用性を報告する。

【方法】舌診撮影システムを参考に、舌診・顔面診撮影システムを作成した。対象は舌所見や顔面所見を撮影することに同意した来院患者とした。舌診・顔面診撮影システムは積分球（直径60cm）と人工太陽灯、自動昇降台を組み合わせたもので、舌診や顔面部の診察所見を撮影するためのシステムである。

【結果】舌診・顔面診撮影システムの長所は以前のシステムよりも、患者の舌所見を撮影する場合に舌を出しやすく、撮影しやすい、移動ができ一定の場所に設置できる点であった。短所は撮影システムが大型で高価であり、設置にある程度の面積が必要であった。また舌診撮影システムよりも顔面を含めた範囲を撮るため、舌所見を詳細な分析するには部分的な撮影が必要であることが判った。

【考察・結語】舌診は東洋医学の診察所見で最も簡便に客観的所見として撮影し、記録できる所見とされており、これまで幾つかの研究がなされている。本学附属鍼灸センターの新患者や再診患者の舌所見や顔面所見を集積し、1) 鍼灸センター実習の教育向上、2) 臨床症例集積の質向上、3) 患者への客観的所見の提示すること（経過観察も可能）、以上の項目を目的に、舌診・顔面診撮影システムを構築した。舌診・顔面診撮影システムは人工太陽灯による自然光の波長と積分球による均一な光を対象の所見に精確に色評価が可能であり、従来の舌診撮影システムよりも患者への負担が少なく、撮影しやすいことが判った。今後、舌診・顔面診撮影システムの小型化やその汎用性への検討が必要であると思われた。

キーワード：東洋医学、鍼灸臨床、舌診、顔面診、撮影システム